

基調報告「大阪の草地の現状と課題」

文・写真 畠 佐代子 (理事、全国カヤネズミ・ネットワーク代表)

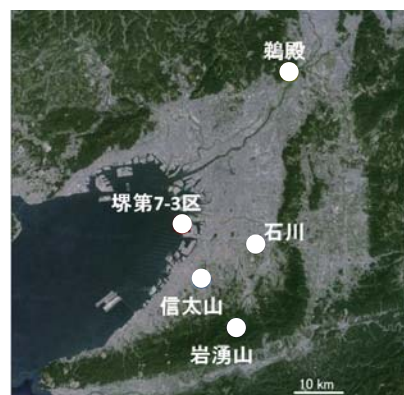


図-1. 大阪府の生物多様性ホットスポット

河川敷や湿地、茅場、放牧地、田んぼの畦や土手などの草地は、様々な野生生物のすみかであり、同時に、人々にとって、茅葺き屋根やよしなど生活の資源を得る重要な場所であった。しかし、生活の変化に伴う草地の利用価値の低下により、「生態系サービスを楽しむ場所」であった草地は、「草ぼうぼうの無用の場所」とみなされるようになった。その結果、開発や造成により草地の消失が進み、現存する草地についても、河川の改修工事や茅場の管理放棄、外来種の侵入などにより草地の質が低下している。

国土交通省の『土地白書』（平成25年版）によれば、国内の草地面積（原野と採草放牧地の合計面積）は、1900年代初頭に500万ha（国土の約13%）であったが、平成23年（2011年）には34万ha（国土の約1%）に減少している。大阪府については、農林水産省の「世界農林業センサス報告書」によれば、1960年の草地面積（森林以外の野草地）は401haであったが、2010年には184haと、50年間で

哺乳類	
要注目	カヤネズミ
鳥類	
絶滅危惧Ⅰ類	ウズラ
絶滅危惧Ⅱ類	ヨシゴイ、チュウヒ、コチョウゲンボウ、クイナ、コミミズク
準絶滅危惧	チョウゲンボウ、オオヨシキリ、セッカ、ツリスガラ
要注目	オオジュリン
昆虫類	
絶滅	オオウラギンヒョウモン、ヒメヒカゲ
絶滅危惧Ⅰ類	ヒヌマイトトンボ、ウスバカマキリ、キバネツトトンボ、ホソハンミョウ、ツマグロキチョウ、シルビアジミ
絶滅危惧Ⅱ類	ネアカヨシヤンマ、アオヤンマ、マルタンヤンマ、イナゴモドキ、エサキアメンボ、ギンイチモンジセセリ、ヘリグロチャバネセセリ、ウラナミジャノメ
準絶滅危惧	タンワンエンマコオロギ、カヤキリ、セグロバツタ、セアカオサムシ、ヒメキマダラセセリ、ウラギンズジヒョウモン、オオウラギンズジヒョウモン、ウラギンヒョウモン、クモガタヒョウモン
要注目	クツワムシ、クルマバツタ
植物	
絶滅	ヒメタデ、オグラセンノウ、ノカラマツ、ツチグリ、ヒメハギ、アイナエ、ハルリンドウ、ヤマジソ、タチコゴメグサ、ヤマルリトノオ、ホソバヒメトノオ、ゴマノハグサ、マツムシソウ、モリアザミ(ヤブアザミ)、カセンソウ、タカサゴソウ、ミヤコアザミ、ヒメゴダイ、オナモミ、ムカゴソウ
絶滅危惧Ⅰ類	オキナグサ、トモエソウ、コバナワレモコウ、シバハギ、アカネスミレ、アケボノスミレ、ミシマサイコ、イブキボウフウ、コケリンドウ、チョウジソウ、フナバラソウ、キセウタ、シオガマギク、ヒキヨモギ、ノコギリソウ(ハゴロモソウ)、フジバカマ、アキノハハコグサ、オグルマ、キクアザミ、ノカンソウ、ユウスゲ(キスゲ)、ヒメユリ、ヒナザサ、ツレサギソウ、ヤマトキソウ
絶滅危惧Ⅱ類	カワラケツメ、マキエハギ、ツルフジバカマ、ヨツバハギ、オオバクサフジ、タカトウダイ、ヒメノダケ、カワラボウフウ(ヤマニンジン)、シラカワボウフウ)、イヌセンブリ、スズサイコ、ジュウニヒトエ、カノコソウ、ハンカイソウ、アマナ、ノハナショウブ、ヌマカゼクサ、ウンヌケモドキ(コカリヤス)、ミノボロ、スズメノコヒエ、マツカサスキ、イタチササゲ、オオヒキヨモギ、キキョウ、ミヤマジュズスゲ、ピロードスゲ(ピロウドスゲ)

表-1. 大阪府RDBで草地の縮小・消滅や変換が減少の要因とされる種

よそ半減した。現在、大阪府内でまとまった草地が存在する場所は、淀川や大和川・石川流域の河川草地、大阪湾の埋め立て地に再生された草地（堺第7-3区）、信太山丘陵の草地・湿地群や岩湧山山頂の茅場など、一部の地域に限られる（図-1）。そうした結果、草地をすみかとする動植物も絶滅の危機に直面している。大阪府のレッドリストでは、絶滅の危険度が高い種には、草地に生息する種が多く含まれる（表-1）。多くの草地性の希少な動植物が生息する、鶴殿、石川河川公園、信太山、堺第7-3区、そして岩湧山の草地環境は、大阪府における生物多様性のホットスポットと位置づけられるだろう。

2009年12月に大阪府が策定した「みどりの大阪推進計画」では、2025年までに、市街化区域の緑被率（樹林・樹木で覆われた面積＋草地等（*）で覆われた面積）÷土地の面積）を、現況の14%から

20%に増やすという目標を掲げており、基本戦略のひとつに「みどり豊かな自然環境の保全・再生」があげられている。本計画では、「みどり」の種類ごとの保全・再生の割合は示されていないが、生物多様性保全の観点からみれば、可能な限り草地の保全・再生に努めるべきである。そのために、行政には草地の保全・再生作業に関わる人材育成や、市民との協働体制づくりをすみやかに進めることを期待したい。また、市民の側からも、多くの人に身近な草地の動植物に関心を持って貰い、さらには草地の保全・再生作業への参加を促すような、イベントの開催や情報の発信などを行っていく必要があるだろう。生物多様性のホットスポットである草地環境を次の世代に受け渡すため、いままさに、本腰を入れて草地の保全に取り組む必要がある。

*草地等：樹林・樹木以外の植生で、芝草類、笹類、つる植物、草本など

各地の報告「石川河川公園における草地保全の取り組み」

文・写真 寺川 裕子 (石川自然クラブ)



写真-1 準絶滅危惧種ミゾコウジュの花



写真-2 ミゾコウジュ自生地のボランティア管理作業



写真-3 カヤネズミのオギ草地育成にチャレンジしている河川敷

大阪府営石川河川公園は、石川の河川敷を主とする全長11.6km、4市1町にまたがる公園で、そのうち羽曳野市と富田林市の間に「自然ゾーン」があります。自然ゾーンは石川中流域で最も川幅が広く、約15年前の市民活動の成果として低水路護岸が整備されず、生物多様性ゆたかなエリアになっています。石川自然クラブはその自然ゾーンを主なフィールドとして、「本来の川の流れや河原の自然環境をとりもどし、地域の暮らしと共生する自然豊かな川づくり」を目標に、①希少植物ミゾコウジュの保護育成（写真-1）、②カヤネズミの生息する草地の保全、③オギ・セイタカヨシ群落の再生などの草地保全活動に取り組んできました。現在の活動は公園指定管理者との協働で実施しており、公園の除草時の工夫や講座の開催などを行っています。

1) 希少植物ミゾコウジュの保護育成
ミゾコウジュは大阪府レッドデータブックで準絶滅危惧種に指定されています。河川が増水・氾濫した

後の裸地などに好んで生えるのですが、近年の治水事業で生育適地がなくなっており、大和川以南で確実な自生が確認されているのは石川だけです。その自生地も、石川の氾濫が少なくなっているため、除草・かく乱などの人工的な管理をしないと、外来草本の侵入や乾燥などで開花が見られなくなります。そこで毎年、ボランティアによる管理作業（写真-2）を実施するとともに、プランター播種による系統保存をしています。

2) カヤネズミの生息する草地の保全
石川河川敷にはカヤネズミが生息しており、オギやセイタカヨシに丸い巣を見つけることができます。しかしながら、やはり河川増水・氾濫の減少でクズが猛威をふるっていることや、予算不足で適当な管理ができないなどの影響で、オギ、セイタカヨシ群落が衰退しつつあり、巣の発見数も年々少なくなっています。そこで営巣地周辺のクズ除去や侵入防止帯の設定（管理車で踏圧）、オギを播種・植栽するなどの

試みを実施しています（写真-3）。

3) オギ・セイタカヨシ群落の再生

ミゾコウジュやカヤネズミの保全草地だけでなく、石川河川公園全体を見渡すとクズのほか、セイバンモロコシ、ネズミムギ、シナダレスズメガヤ等の外来種がたいへん目立ち、河川本来の在来種草地が減少しています。そのため、数年前に新しく整備した草地広場には、オギ、セイタカヨシ、チガヤの根茎移植の提案を行い、少しずつですが成果も現れています。今後は限られた予算の中でどのような管理を行っていくか試行錯誤が続きそうです。

河川改修によって川の氾濫という自然の営みが途絶え、多くの河川と同様に、石川の河川敷の草原も、今、消滅・変貌の危機にあります。南河内の知られざる草地として、多くの方に石川河川敷に関心を持っていただき、ミゾコウジュやカヤネズミの将来を応援していただきたいと思っています。

